



ステルダム、バルセロナ、ベルリン、コペンハーゲン、リスボン、ミュンヘン、ザルツブルグ、タリン)の住民は「都市のインフラと設備を改善する」といった次の対策に好意的な傾向がある。

「現地の住民および現地の企業とコミュニケーションを図り、観光の計画立案に関与してもらう」「都市での振る舞い方に対して訪問客ともっとコミュニケーションを図る」「一年の間で訪問客を分散させる」「住民と訪問客が会い、融和できるような都市体験を考案する」

「オーバーツーリズム」レポートでは都市部での観光客の増加に対する理解と対応を示唆する11の戦略と、その戦略のもとに6-7本の対策を示し、解決へのアドバイスとしている。

## 7. 長期的に取り組まれたメインコア地域

11の戦略とは、以下のとおりである。

- (1)都市内外での観光客の分散を促進する
- (2)時間による観光客の分散を促進する
- (3)観光客の新たな旅行ルートと名所を活性化させる
- (4)規制を再検討し、調整する
- (5)観光客のセグメンテーションを強化する
- (6)確実に地域のコミュニティーが観光から利益を得られるようにする
- (7)住民と観光客双方の利益になる都市体験を創出する
- (8)都市のインフラと設備を改善する
- (9)地域の利害関係者と意思の疎通を図り、関与してもらう
- (10)観光客と意思の疎通を図り関与してもらう
- (11)モニタリングと対策の手段を定める

これらのなかにはすでに沖縄で取り組まれているものもあるが、観光の利益を地域住民に約



## 空手を伝え、広める！ -近代の空手教師たち-

崎原 恭子

沖縄県文化観光スポーツ部  
空手振興課主査  
SAKIHARA Kyoko

仲村 顯

沖縄県文化観光スポーツ部  
空手振興課空手関係学芸業務補助員  
NAKAMURA Akira

### はじめに

2017年3月4日にオープンした沖縄空手会館は、道場施設・展示施設・特別道場の3つの施設で構成されている。展示施設には、沖縄空手の歴史や関連資料を展示する資料室があり、この一角にある企画展示室で、2019年9月12日から2020年3月24日までの間は、沖縄空手と学校教育をテーマに据え、近代の学校教育で空手の指導に携わった空手家たちが、空手を守り伝え、広めていった活動の軌跡を追う企画展を開催している。本稿では、当該企画展の内容に沿って、琉球王国時代には士の嗜みとして限られた人々の武術だったとされる空手が、明治期に学校教育に導入されたことを契機として沖縄県内各地へ広まっていった状況を紹介する。なお、本稿では「唐手」または「空手」という表記を特に区別はしないが、鉤括弧でくくった引用文内については原典の表記を用いることにした。

### 1. 明治政府による琉球処分と空手

琉球王国時代末期の19世紀半ば以降、度重なる西洋列強のアジア進出や明治政府の成立など、琉球を取り巻く国際環境が大きく変化した。明治政府は琉球を日本の領土とするため、1872年に琉球藩とし、1879年には沖縄県を設置した。この一連の流れを明治政府による琉球処分または廢琉置県という。政治や経済は日本本土から来た人々に握られ、徐々に近代化が進められていくとともに、琉球王国時代の文化の多くが衰退していった。当時の沖縄県政の基本方針は、旧支配者層を優遇して抵抗を避けるとともに、農民層の台頭を抑えるために土地や税などの制度を据え置きにするものだった。その後1894～1895年の日清戦争による日本の勝利によって、旧支配者層の県政への反発や中国(清)

に頼る琉球王国の復興を目指した活動が収束していったことに伴い、社会制度の改革や徵兵令などが実施されるようになった。

琉球王国時代の武術は、士の嗜みとして、秀でた人物に師事して継承された。そのなかで、首里手中興の祖といわれる松村宗棍(1809-1899)などが、次世代の空手家たちを育成した。明治政府による琉球処分後の空手を巡る詳しい状況は分からぬが、当時の『琉球新報』(1893年創刊)に個人的な武術指導の様子や、かけ試しなどの記事が見られる。また、1901年に首里の小学校で空手が指導され、師範学校の学内誌には1902年に開催された連合運動会で空手が実演されるなど、断片的ではあるが、教育の場に空手が取り入れられた様子が散見される。

ここで、近代の沖縄で最初期に確認される空手教師の原国政勝(1863-1930)を紹介する。沖縄空手史上知られていない人物だが、『沖縄県人事録』(1916年)などには、父親から空手を学び、師範学校卒業後に小学校の教師になったことが記されている。原国が首里尋常小学校に在任している頃、ある事件に巻き込まれ、当時の人々の記憶に刻まれた。1895年の日清戦争終結後、いわゆる頑固党の活動は沈静化に向かったが、小学校の児童らが彼らの一群をひやかしたことの発端とする騒動が起こった。これを収めようとした原国が頑固党にいた「唐手」の使い手らから暴力を振るわれ傷害事件にまで発展したが、幸い原国人も空手を習得していたため命に別状がなかった、というものである。

原国の空手教師としての活動は明らかではないが、『沖縄県人事録』に空手を好み生徒に奨励したとあるため、教育現場で空手の普及に努めていたことは間違いない。

## 2. 学校での指導と県内各地への広がり

1889年に大日本帝国憲法、1890年に教育の指針を示した教育勅語が発布され、天皇を中心とした本格的な国家体制の構築が進められた。教育制度については、1872年の学制から始まり、身分や性別に区別なく教育を受けさせる方針が定められた。

沖縄では、1880年に小・中学校、師範学校が設立され、日本語(共通語)を用いた授業が開始された。当初、生徒たちの状況に合わないとの理由で入っていなかった体操の授業が1885年から取り入れられ、1887年からは軍隊式の体操である兵式体操が中学校に導入された。

そのような中、1905年2月、空手を中学校で指導する活動が前年の1904年から始まっていたことが新聞報道された。当時の中学校では、陸軍教導団出身の花城長茂(1869–1945)が体操教師を務めていた。校長の指示により、花城を通じて糸洲安恒(1831–1915)が非常勤の教師として迎えられ、空手の授業が開始された。同じ頃、師範学校には花城と同じく陸軍教導団出身の屋部憲通(1866–1937)が教師を務めており、師範学校でも空手の授業が始められたといわれる。

この時期に空手が授業に取り入れられた背景として、生徒の優秀な体格形成に空手が役立つと進言した役人がいたり、1895年に武道の普及

を促すため設立された大日本武徳会からの働きかけを契機として、1902年に沖縄県知事が大日本武徳会の沖縄県地方委員長に就任したことなどが指摘されている。

次に、中学校で空手を指導した糸洲安恒を紹介したい。糸洲は松村宗棍から空手を学び、花城や屋部などの逸材を育てた。1905年、中学校に空手が導入されると、週1、2回程度来校し指導したようである。糸洲は1908年10月付けで、現在「唐手十ヶ条」(または糸洲の十訓)と呼ばれる空手を学ぶ心構えを記した。この中では、強靭な身体や精神を養成する空手の有益性を説き、中学校や師範学校で空手を習得し、教師として各地の小学校で精密に教えることが全国への普及に繋がり、沖縄県民だけでなく国のためになると記述されている。

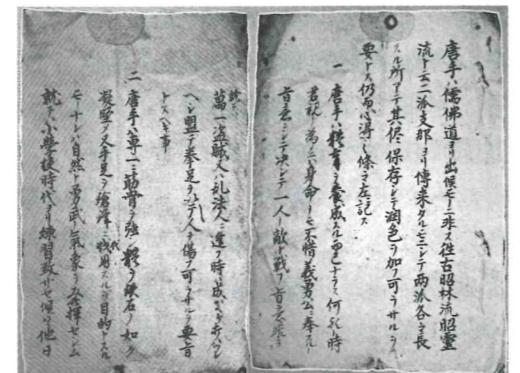


写真-2 糸洲安恒の「唐手十ヶ条」写真(部分)、『空手道大観』(1938年)(宮城篤正氏所蔵)



写真-1 沖縄県立中学校卒業記念写真(1905年)(高知市立市民図書館所蔵)※中城文庫  
前から2列目向かって右端に糸洲安恒と比定される人物。同列の左から6番目は花城長茂

政府が皇民化や軍事化を進めた明治期においては、1894～1895年の日清戦争、1904～1905年の日露戦争という国際的な戦争を経験し、学校での生徒の身体向上の発育を目指した各種体操や武道(剣道や柔道)の導入が検討されていた。このような世の中の動きを糸洲は察知し、「唐手十ヶ条」のなかで学校教育における空手の国益性の高さを訴えたのではないだろうか。そのような状況のもと、琉球王国時代から連綿と続く空手の意義を時代の潮流に乗せて説いた知恵と工夫が、空手を守り伝えることに結びついたものと考える。

また、中学校に空手が導入された1905年以降、県内各地の催しで空手が披露される様子が新聞で報道されるようになる。このことからも、県内各地に空手が広まった様子をうかがうことができる。

あわせて、糸洲に空手を学んだ花城長茂と屋部憲通を紹介する。

花城は1916年に退職するまで長らく中学校の教師を務めていた。1936年に発足した沖縄県空手道振興協会では、初代指導部長を務めた屋部憲通の後継として中心的な役割を担った。1938年に刊行された『空手道大観』では慈恩の型を演武・解説している。



写真-3 慈恩の型(花城長茂) (『空手道大観』(1938年)掲載)

花城は沖縄で徴兵令が始まる前に志願して陸軍教導団に入ったため、率先して軍事化・近代化に傾倒したイメージが持たれている。しかし、仲村顕の調査によって、中学校で同僚だった山口泰平の日誌から、琉球王国の誉れを心に秘め

た人物であることがわかった。沖縄の日本化を積極的に推進したわけではない、心の内を知れる貴重な記録である。

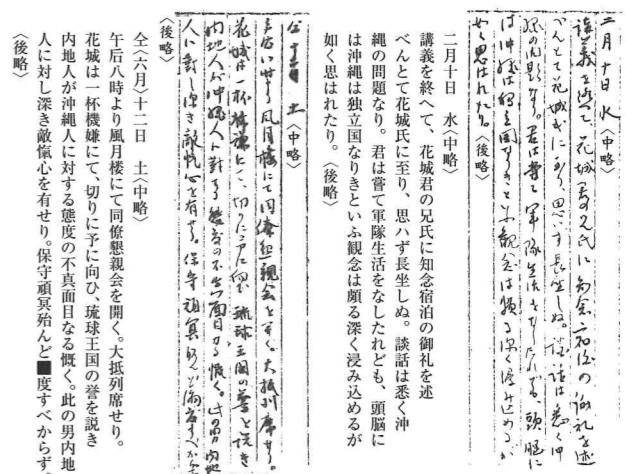


写真-4 『山口泰平日誌』(部分)(1909年)(沖縄県立図書館所蔵)

また、屋部憲通も陸軍教導団に属した人物である。他府県人といざこざが起き「仕方ない時には唐手でやっつけた」という述懐が残されているほど、空手を身につけていた様子がうかがえる。従軍を経て、1906年4月から師範学校で空手を指導した。一時期、渡米のため教職を離れたが、帰郷後には師範学校で空手の指導を再開した。1932年に来沖した山崎正董博士一行に對して空手指導の様子を披露する屋部の写真が残されている。

師範学校は原則として学校の教師となる生徒たちを養成する。空手を学んだ卒業生が沖縄県内各地へ赴任し、児童生徒へ空手を指導したと考えると、屋部の役割は極めて大きいと言えよう。

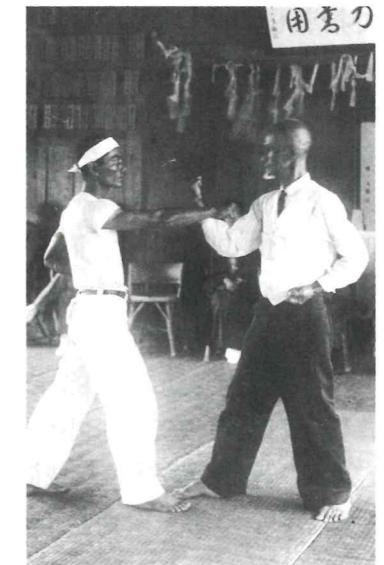


写真-5 屋部憲通(沖縄県師範学校)(1932年)(熊本県立図書館所蔵、野々村孝男『写真集 懐かしき沖縄』琉球新報社(2000年)掲載)

加えて、教育に携わった知られざる近代の空手家として与那嶺惟俊(1877-?)を紹介する。教育勅語の沖縄語訳や作曲活動、特別支援教育の先駆けをなした多才な人物であり、空手との関わりでは学校現場で棒術の指導を行った。与那嶺は「棒体操」という名目で指導していたようだ、自身の論文のなかで棒術にかける情熱を綴るとともに、空手の普及と相反して棒術に関心が向けられていないことを歎いている。

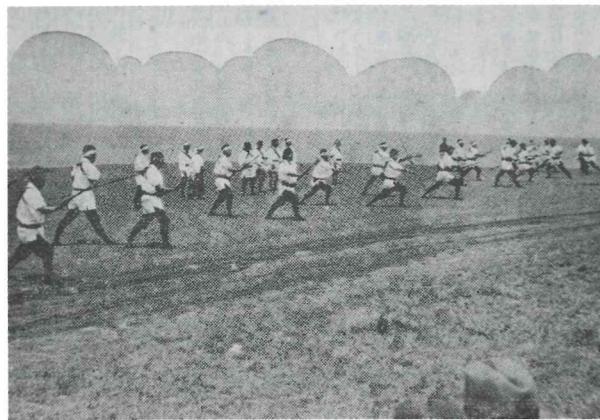


写真-6 沖縄独特の体育「棒踊り」(『沖縄教育』No.237(1936年)掲載)(沖縄県公文書館所蔵)

与那嶺は現在の北中城村域に生まれ、師範学校を卒業した後に小学校教師となった。1939年に行われた「教育者の楽しみ」という座談会への出席を最後に、その後の消息は分かっていない。

教育現場の空手家としては、商業学校や水産学校で指導した東恩納寛量(1853-1915)もいる。また、1920年代に空手を東京で指導し普及を担った船越(富名腰)義珍(1868-1957)も小学校の教師を務めていた。さらに、空手や古武術を小学校で指導し、のちに沖縄県空手道振興協会の書記を務めた真栄城朝亮(1883-1944)、小・中学校で指導した徳田安文(1886-1945)、工業学校や師範学校で指導を担った大城朝恕(1887-1957)、小学校校長を務め、戦後に東恩流を興した許田重發(1887-1968)、商業学校や師範学校で指導した剛柔流の流祖である宮城長順(1888-1953)、水産学校や師範学校に在任した後、関西を中心に空手を広めて糸東流を立ち上げた摩文仁賢和(1889-1952)、小学校や中学校で指導し、空手の普及に邁進した城間真繁(1891-1957)等々、多くの空手家が指導に携わっていた。

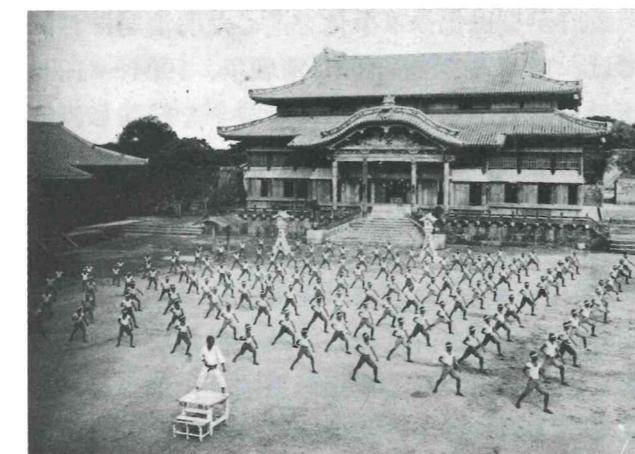


写真-7 小学生の空手道演練(首里市第一小学校生徒) (『空手道大観』(1938年)掲載)

### おわりに

琉球王国時代から沖縄県の設置という大きな変革期を通じて、沖縄独自の文化の多くが衰退した。そのような状況に対し、日本化・軍事化の潮流に上手く沿いながら、先人たちは学校教育のなかに空手を導入していった。先人たちにとって空手は、自らが修得した技法の存続だけでなく、沖縄の歴史のなかで培ってきた文化として、後世に伝えられるべき遺産と意識されるものだったかもしれない。

空手は特に1920年代以降、沖縄から飛躍した指導者たちによって県外や海外へ伝えられた。それから約100年経った現在では、世界中に約1億3,000万人もの空手愛好家がいるといわれるまでに広がっている。空手が競技種目となつた2020年の東京オリンピック開催も控え、「空手発祥の地・沖縄」は、世界中からの注目度がますます高まると見込まれる。沖縄が世界に誇る伝統文化である空手の保存・継承・発展を目指し、沖縄空手振興ビジョン(2018年3月策定)及び同ロードマップ(2019年3月策定)に基づき、県、空手関係団体、経済界などの様々な分野が関わる取り組みやユネスコ無形文化遺産登録推進活動も行われている。

そのような状況を踏まえると、近代国家が皇民化を強く推進した明治期において、沖縄の伝統文化である空手を学校教育に取り入れ、守り、広めてきた沖縄の先人たちは多大な功績を残したと言える。

## 琉球伝承紀行

~民間伝承の現場を訪ねて⑨~

### 琉球王国時代の八重山諸島

伊敷 賢 琉球歴史伝承研究所 代表  
ISHIKI Masaru

乗って多くの古代人が南方文化を運んで来たと考えられる。

前号(No.90, 52p)でも紹介したが、新石垣空港建設に伴い2008(平成20)年に発見された白保竿根田原遺跡は、2万年前の石器時代の人骨が20体分も発掘されたのである。波照間島の下田原遺跡や与那国島のトゥグル浜遺跡からは約4000年前の貝器が発見されている。人骨から台湾原住民との関連性も考えられていることである。土器文化を持たない各時代の複合遺跡であるらしく、今後の研究成果が待たれる。

西表島の古見や久米島の「クミ・クメ」は柳田国男氏の説によると、米(稻作)を持ち込んだ地名であると考えられている。紀元前211年に秦の始皇帝の命令により、東海の蓬萊島に不老長

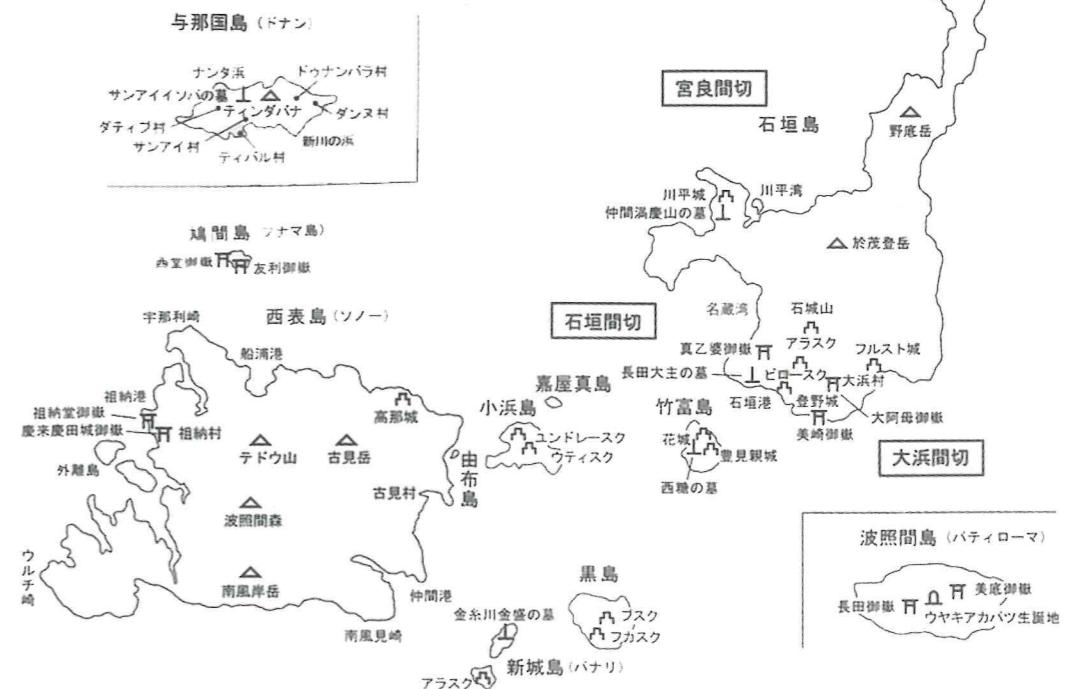


図-1 八重山諸島の主な史跡『琉球王国の事実』201p